

東海道五十三次

てくてく歩く日帰り一人旅

太田康直

東海道五十三次 一知られざる穴場— その②

先回は1番目の「品川宿」までで1回分を費やしてしまった。そこで今回以降は少なくとも1回で数宿分を目指し、なくもがなの遺跡をすっ飛ばしてずんずん進めて行きたい。

先回の道（国道15号）の左側の歩道を歩いて行くと多摩川に架かる新六郷橋があり、渡り終えた所に「史蹟東海道神奈川宿六郷の渡し」の説明板。ここは川崎宿（2番目の宿）の入り口であり、すでに神奈川県に足を踏み入れているのである。



（歌川広重 川崎宿）

この道を進むと「川崎宿田中本陣跡」次いで、「広重の絵と川崎宿の由来」の説明板。さらに道

は「神奈川宿佐藤本陣跡」に続き、いつの間にか神奈川宿（3番目の宿）に入っていた。その先、京浜急行・八丁畷駅の手前の右側に芭蕉碑「麦の穂をたよりにつかむ別れかな」がある。

元禄7年（1694）5月に深川の芭蕉庵を発ち伊賀へ帰る途中、見送りに来た弟子たちとこの地にあった茶屋で団子を食べながら詠んだ句という。芭蕉はこの年の10月（陰暦）に亡くなったため関東での最後の句となり、関東の弟子たちとは文字通り永久の別れとなった因縁めいた句である。

この先のJR鶴見駅前辺りには大きな道路が複雑に交差していて、今まで歩いて来た道の続きが分かりにくく、やっと探し当てて少し歩いて行くとまたしても大きな道路の交差点。渡り終えてからも細く枝分かれした旧東海道が見つからない。両側に魚屋さんの店の立ち並んだ道であると誰かが具体的に教えてほしかった。

その道を辿って行くとその先に「生麦事件碑」がでんと構えていた。しかし実はその大分手前の民家の軒先に、「生麦事件発生現場」と書かれた

板があって、東海道の案内書にも載っていない、東海道の歩行者も大方は見逃してしまうのではないか。「生麦事件碑」のある地点で、道は再び国道15号と合流。

その先での私の二兎を追ったがゆえの大失敗を披瀝しておく。実は本で調べて、横浜開港に先立ち神奈川宿内の寺院に欧米各国（オランダ・フランス・イギリス・アメリカ）の領事館を置くよう、幕府から命じられたお寺探しをしようと思ったのである。結果はそれらの寺院がすべて東海道の面していたのではないという当たり前の事実の前に徒労に帰した次第。辛うじて探し得たのは、小公園の中の「オランダ領事館跡」の小さな碑（長延寺跡の記述なし）と、皮肉にも東海道へ戻って屋根の修理を口実に幕府の命令を断った良泉寺のみ。良泉寺は健在で説明板もあった。炎天下でうろつき回った拳句、体力を消耗し切って肝心の東海道の遺跡を探す気力を放棄した。この後、道は上り坂になり神奈川の台と呼ばれた、かつては茶屋の立ち並んだ所に出た。登り切ると「神奈川台関門跡」の大きな碑。ここが神奈川湊を見下ろす景勝地であり、JR 横浜駅もこの下の方に位置する。

ここで現横浜市の七不思議ならぬ三不思議（私にとっての）を披露する。まず市内に三つもの宿場（神奈川宿・保土ヶ谷宿・戸塚宿）を抱えていること。



（歌川広重 神奈川宿）



（歌川広重 保土ヶ谷宿）



（歌川広重 戸塚宿）

次いで市内に武蔵と相模の二つの国を持っていること。3番目の不思議は鉄道マニアならご存知かも知れないが、JR 東海道線上にありながら保土ヶ谷駅だけは横須賀線の駅。東海道線へは東の横浜駅か西の戸塚駅で、乗り換えねばならない。ということで私は保土ヶ谷駅を終点駅に選んだものだから、帰りの鈍行は戸塚、小田原、熱海、沼津、島田、浜松、豊橋と乗り継ぎ、豊橋から新快速で尾張一宮（乗り換えの新記録）までと、8列車乗り継いだ。ちなみに東京までの乗り換えの最短は浜松、熱海の2回だけというダイヤもあるから、念のために。

さて次回は当然保土ヶ谷駅前の東海道から始めるわけだが、歩き出して踏切りを渡って直角に国道1号と合流する地点に保土ヶ谷本陣跡があり、左折して国道1号をしばらく進むと、「保土ヶ谷脇本陣（水屋）跡」の説明板がある。この辺りが保土ヶ谷宿（4番目の宿）であった。その先には一里塚と上方見附跡の解説板も。さらにその先を右折して坂道を上るのが旧東海道。江戸時代の難所であった権太坂である。坂の名の由来や、「投げ込み場跡」の碑等、現地の説明板で詳しく分かるので、ここでの説明は省略。その先の頂上にある「武相国境之木跡」を始めとする遺跡こそが、現横浜市内で武蔵と相模と国境を分けている証なので、くれぐれも見落とさないように。

ここから戸塚宿の方へ下るのが品濃坂。途中に品濃一里塚があり、その先が戸塚宿（5番目の宿）でまだ現横浜市内。実際歩いてみると品濃坂を下りてからの道がはっきりせず、難儀して国道1号に辿り着いて戸塚駅手前で「戸塚宿見附跡—江戸方見附」碑を発見してヤレヤレ。ここが戸塚宿の入り口。柏尾川に架かる吉田大橋を渡ったが、広重の絵の「こめや」の下に、「左かまくら道」の道標が書き込まれているのが当時のこの橋である。その先、東海道線の踏切を渡ってすぐの右側に清源院長林寺。家康の愛妾お万の方ゆかりのお寺。境内には珍しい心中句碑、「井にうかぶ^{つかい}番の果てや秋の蝶」と芭蕉の「世の人の見つけぬ花や軒の栗」句碑。その先の消防署手前の石垣の上に渡邊本陣跡碑が残っていた。さらに南に進むと右側に、戸塚の名の起源となった富塚八幡宮があり、「鎌倉を生きて出けむ初公魚^{はつがつお}」の芭蕉句碑。ここから道はゆるやかにカーブして宿の西外れ、上方見附跡になる。道の左右に一對となった石垣の見附が新築され、若松が植えられていた。この辺から大坂と呼ばれる急な坂。上りきると 国道1号のバイパスに合流。旧道は左側の歩道。やがてその先に「お軽勘平戸塚山中道行の場」の碑。「仮名手本忠臣蔵」の虚構世界を現実化したもの。さらに進んで影取町辺りには道祖神や馬頭観音が多く残っていた。鉄砲宿を抜け松並木の残る道場坂を下りて行くと、遊行寺が見えて来る。

藤沢宿（6番目の宿）はこの遊行寺の門前町として栄えた宿場である。「踊り念仏」で知られる一遍上人の開祖になる時宗の総本山で見るとべき史蹟や文化財が多いお寺だが、それらすべてを観光案内書に譲るとして、国指定の史蹟になっている小さな「敵味方供養塔」だけは見落とさないでほしい。上下の秩序より力の優先する戦国時代の先駆けとなった上杉禅秀の乱（応永23・1416）の犠牲者を敵味方なく弔うために、時の住職が建てた塔。



（歌川広重 藤沢宿）

藤沢宿には他に見るべき遺跡は皆無。宿はずれの道の辺にて「おしゃれ地蔵」を発見。藤沢市教育委員会の説明板に、「女性の願いは何でも聞いて下さり、満願のあかつきには白粉を塗ってお礼をする習慣が地元に残っている」とあり、形態的には道祖神だが、地元の意思を尊重して地蔵尊を通しての由。真っ白なお顔に真っ赤な口紅が引かれており、少々異様な感じであった。男神の方も無論のこと、お顔は真っ白。これぞB級遺跡の典型。